

学位請求論文審査報告書

氏名 樋口 大慈
論文題目 金剛真心の獲得一願生浄土の歩みとは一
審査委員 主査 大谷大学教授 一楽 真
 博士（文学）[大谷大学]
 副査 大谷大学教授 三木 彰円
 副査 大谷大学教授 織田 顕祐
 博士（文学）[大谷大学]
 副査 大谷大学名誉教授 延塚 知道
 博士（文学）[大谷大学]

I. 論文内容の要旨

本論文は「金剛真心の獲得一願生浄土の歩みとは一」というテーマで、本文 167 頁、註 21 頁からなる。親鸞における信心の意義を確かめることを主題とした論文である。特に「金剛心」の語に着目する親鸞の意図を尋ねることから、親鸞が語る信心の特質を明らかにしようとしている。

本論文は、親鸞における信心を考察する際に、まず『教行信証』『信巻』に展開される三心一心問答を中心にして信心の内容を確かめている。これは従来からもなされる基本的な考察と言えるが、それに加えて「化身土巻」における仏智疑惑の問題を合わせて考えようとしている。それは、信心といいながら、人間の自力心や計らいによって、如来の本願に帰すということがいかに成り立ちにくいかという問題をはらんでいるからである。この問題は親鸞自身によって第十八願に加えて、第十九願・第二十願を取り扱う中で示されているものである。それを論者は聖教を丁寧に読解することにより、三願の関係を見渡しながら、親鸞の意図を明らかにしようとしている。

全体の構成は以下の通りである。

序

第一章 金剛真心の獲得一「我一心」の証明一

第一節 本願成就文

第一項 真実教の決定

第二項 本願成就文

第二節 真実信推究の視座一獲信の内実一

第一項 信楽の獲得

第二項 「信巻」の標挙

第三項 難信と獲信

第四項 『論註』讚嘆門釈の視座

第五項 清浄願心の回向成就

第三節 「三一問答」究明①一信から願へ一

第一項 字訓から仏意へ

- 第二項 至心積
- 第三項 信樂積
- 第四項 「本願信心の願成就の文」
- 第五項 信は道の元とす
- 第四節 「三一問答」究明②－願に生きんとする者－
 - 第一項 欲生積
 - 第二項 「本願の欲生心成就の文」
 - 第三項 金剛の真心
 - 第四項 金剛心と菩提心
 - 第五項 必可超証大涅槃の生－願生浄土の仏道－
 - 第六項 「唯除」の意義
- 第二章 三経の大綱－金剛の真心を最要とせり－
 - 第一節 『観経』三心一異を問う
 - 第一項 「化身土巻」の問答－三経への視座－
 - 第二項 「要門積」の展開－方便化身の浄土－
 - 第三項 『観経』三心一異を問う－『観経』顕彰隱蜜の義－
 - 第四項 広開浄土要門－如来の異の方便－
 - 第五項 報土の真因は信樂を正とす－第十八願は別願の中の別願－
 - 第六項 仮令の誓願良に由あるかな－極重悪人唯称弥陀－
 - 第二節 『阿弥陀経』一心一異を問う－「真門積」への視座－
 - 第一項 『阿弥陀経』一心一異を問う－『阿弥陀経』顕彰隱蜜の義－
 - 第二項 三経の大綱－金剛の真心を最要とせり－
- 第三章 「果遂の誓い」の意義－願生浄土の歩みとは－
 - 第一節 「真門」開頭の意義
 - 第一項 「真門積」への視座
 - 第二項 定散雑心と定散専心
 - 第三項 執持名号の意義
 - 第四項 難信の課題
 - 第五項 邪見の証文
 - 第六項 善知識と如来大慈悲
 - 第七項 大悲弘く普く化す
 - 第二節 「果遂の誓い」の意義－難思議往生を遂げんと欲う－
 - 第一項 願海転入の自覚
 - 第二項 難思議往生を遂げんと欲う

結

全体は三章立てで、第一章は「金剛真心の獲得－「我一心」の証明－」と題して、『教行信証』『信巻』『三心一心の問答』を中心として、本願と信心の関係を考察し、他力の信心がどのような仏道を開くのかを尋ねようとしている。第二章は「三経の大綱－金剛の真心を最

要とせり」と題して、「方便化身土巻」の「三経一異の問答」を中心に、衆生の「沈・迷」の問題を見ていこうとしている。第三章は「果遂の誓い」の意義―願生浄土の歩みとは―と題して、「方便化身土巻」の「真門釈」を中心に、衆生の「難信」「仏智疑惑」の問題を尋ねている。以下、簡単にその内容について触れておく。

第一章では、親鸞における真実教決定の視座を「仏の教化がこの身に実を結んだという実感」と確かめた上で、『大無量寿経』を読み解いていく親鸞の課題について尋ねている（第一節）。その上で、「教巻」「行巻」に続いて「信巻」が置かれることの意義を考察している。そして、「難信」の理由を自己執着の問題に見定めて、衆生における獲信がいかなることによって成り立つのかを「如来回向」によると確かめている（第二節）。そこから「三心一心問答」を読み解く形で、信心の内実を「至心」「信樂」「欲生」の三つの面から押さえていく。その際、本願成就文が二つに分けて引用されることに注意して、信心が金剛心の意味をもつことを押さえている。また本願成就文に「唯除」の文があることにも留意し、如来が衆生に往生を呼びかける「招喚の勅命」であることを確かめている（第三節、第四節）。

第二章では、「化身土巻」の「三経一異の問答」を取り上げて、まず『観経』に「定散二善」が説かれることの意味を尋ねている。その根には衆生における「自性唯心に沈む」「定散の自心に迷う」という問題がある。そこから第十九願が誓われた意義について考察を加えている（第一節）。次に、『阿弥陀経』に説かれる「一心」の意味を尋ね、三経の大綱が「金剛の真心を最要とせり」という一事にあることを確かめている（第二節）。

第三章では、「化身土巻」の「真門釈」を中心にして、第二十願が誓われたことの意義を考察している。ここには衆生における「難信」の問題およびその根にある「仏智疑惑」の問題が見据えられている。特に第二十願が「果遂の誓い」と呼ばれることに注意して、衆生においては「難思議往生を遂げんと欲う」という意欲として現れることだと押さえている。

結では、親鸞における真実信心が「横超の金剛心」として、五濁悪世を生きる衆生に、願生の仏道を開くことを述べている。

II. 論文審査結果の要旨

本論文は、『教行信証』「信巻」の「三心一心の問答」と「化身土巻」の「三経一異の問答」を中心に、親鸞における信心の意義を確かめる論文である。大谷大学大学院における五年間の学びを大へんよくまとめて形にした論文と言える。特に『教行信証』の文脈を丁寧に従いながら、親鸞の意図を読み解いていこうとする姿勢に貫かれている。

法然の仏教は専修念仏と押さえられるように、万人の救いをただ念仏一つにおいて明らかにするものであった。ところが、その念仏を多くの行の一つと捉え、他の行ができない者のための容易な行と考えるならば、法然の仕事の意義は見失われることになる。そこに親鸞が受け継いだ仕事があったと言ってよい。専修念仏は単に口に念仏を称えることを繰り返すことではなく、その根本に阿弥陀仏の本願を信受するという信心があることを親鸞は明確にしたのである。この点が本論文の基盤にあり、その視座で一貫して、親鸞における信心のもつ意味を確かめていることがまず評価できる。

また、親鸞が信心を「金剛心」という語で押さえていくことに着目し、迷いの生死の中にあっても「動乱破壊」されない信心の意義を確かめている。浄土教というと、どうしても死

後の往生というイメージがもたれやすいが、現実の人生全体が仏道から退転しないという仏道成就という課題に応答するのが親鸞の掲げた浄土真宗である。この点を押さえて論を進めていることも評価できる。

また、「金剛の真心」という語に着目して、「化身土巻」と併せて信心の問題を尋ねようとしたことも評価できる。「化身土巻」に展開される「方便」は、どうしても真実に入るための前段階と捉えられることが多い。それを論者は、教えに帰したところにも残り続ける自力執心の問題を見据え、真実に返そうとする方便が決して一過性のものでないことを確かめている。特に第二十果遂の願を衆生の「信罪福心」と対比して考察し、方便真門が説かれる意義を尋ねようとしている点は大切である。

ただ、論述の進め方や文章表現において工夫すべき余地もある。口述試問では、これらの確認すべき点、また今後の課題となるであろう点を中心に活発に意見が交わされた。すべてについて触れることはできないので、主なものをいくつか記しておきたい。

- 1、 真宗学の専門的論考という意味では、先行研究を踏まえてよくまとめられている。ただ、他分野の人が読んでも主題が分かるようにする必要があろう。
- 2、 論文全体にかかわることとして、『教行信証』の文章を順を追って丁寧に尋ねようとしている点は評価できる。ただ、すべての文章について触れようとしたために、一つ一つの内容の考察がやや表面的な取り上げ方になってしまった箇所も見られる。ポイントを絞って論ずればもっと説得力をもつものになったと思われる。
- 3、 第十八願、第十九願、第二十願という機の三願を取り上げて、衆生における自力の問題を考察しようとした点は非常に大事である。三願が共通して「至心〇〇欲生」という内容を持ち、親鸞もそれを願名としている。その点にもっと注意を払って論ずれば、三願の関係をさらに明確にできたと思われる。
- 4、 難信、仏智疑惑という問題を衆生における善人意識という視点から尋ねていることは大切である。それが何によって願生浄土の歩みとなるのか。これについては、「大般涅槃道」という大きな視座をもって、さらに考察が加えられることが期待される。

本論文は、上記のようないくつかの課題を残してはいる。しかしながら、聖教を丹念に読み込んで、親鸞の意図に迫るという意味においては優れた論文である。そのことは口述試問の質疑応答を通して十分に確かめることができた。

審査に必要とされる最終試験については、審査員全員により 2020 年 1 月 23 日に試問を行った。その結果、審査員一同一致して、樋口大慈に大谷大学博士（文学）の学位を授与することが適当と判断した。